

# ゲイコミュニティの形成と変容 ——福岡における HIV・エイズ予防啓発活動の事例から——

キーワード：ゲイコミュニティ，性的マイノリティ，社会運動，HIV・エイズ

人間共生システム専攻

井上 智史

## 1 問題意識

近年、「LGBT」という語の流行に象徴されるように、日本において性的マイノリティへの社会的な関心が高まっている。

日本の社会学における性的マイノリティの研究は、ゲイ解放運動の影響を強く受けたゲイ当事者による研究がおこなわれるようになった1990年代以降、セクシュアリティ研究やクィア・スタディーズなどといった学際的な研究領域を形成しつつ蓄積されてきた。しかし、そこでの議論は首都圏の性的マイノリティを中心としてなされたものであり、河口和也（2016）が指摘するように、大都市圏以外の地方に暮らす性的マイノリティの姿は不可視化されている。

また、性的マイノリティをめぐる社会運動としては、従来 HIV・エイズに関する社会運動が主にゲイによって担われてきたが、近年の「LGBT」をめぐる運動と、HIV・エイズをめぐる運動はどのような関係にあるのだろうか。

「LGBT」という言葉が性的マイノリティの集合性に大きな影響を与えるように見える今日、もはや、HIV・エイズというイシューによってゲイの集合性が規定される時代は終わったのだろうか。

本論文では、このような問題意識にもとづいて、地方都市である福岡において展開されてきた HIV・エイズに関する社会運動に注目し、HIV・エイズをめぐる運動と「LGBT」をめぐる運動の連続性／非連続性を検討する。

## 2 先行研究

まず、性的マイノリティをめぐる用語の整理を通じて、反差別運動を通じて支配的な認識となった、性自認、生物学的性別、性的指向との3要素による「性の解釈枠組み」（石田 2006: 156）と、今日の「LGBT」の流行ともいえる状況について確認した。そこでは、性の解釈枠組みがもつ排他性や本質主義的な側面が、「LGBT」という語にも引きつがれていることが明らかになった。

つづいて、性的マイノリティをめぐる社会運動について、特にゲイが中心となって展開してきたゲイ解放運動、HIV・エイズをめぐる運動についてレビューを行い、砂川秀樹（2015b）による、運動の志向性の議論と、新ヶ

江章友（2013）によるエイズ対策をめぐる「同性愛者」の主体化の議論から、性的マイノリティをめぐる展開されてきた運動について、その志向性にもとづいて若干の整理を行った。

1990年前後に、ゲイ解放運動団体、ソーシャルサービス提供団体が成立し、それぞれ活動を展開してきたが（砂川 2015a）、当初、ラディカルな志向性を持っていたゲイ解放運動が、1990年代後半の HIV・エイズ問題の深刻化によって、ソーシャルサービス提供団体との結びつきを強め、「エイズ予防指針」の下での「同性愛者」の国家による承認に象徴的に示されるように、次第に同化主義的な志向性をもつようになっていったことが示唆された。

さらに、新ヶ江の議論により、エイズ政策と運動が結びつきを深めるなかで、国家によるエイズ政策が直接アプローチできない「同性愛者」にゲイ当事者が介入を行うために、「ゲイ・コミュニティ」が構築され、厚生省「疫学研究班」とゲイによって組織される NGO の協働による HIV・エイズ予防啓発活動が活発化したことが確認された。

研究班と NGO との協働による予防啓発は当初、大阪、名古屋、東京で展開されるようになったが、2002年度以降、厚生労働省「MSM 対策研究班」が組織され、大都市圏における協働のモデルを全国で展開して行くことが目指され、2003年には福岡、2004年には仙台、2007年には那覇において研究班と各地の NGO との協働がそれぞれ開始された。また、協働関係の拡大にあわせて、2003年から2010年までに、上述の全国6地域にコミュニティへの予防啓発活動の拠点としてコミュニティセンターが設置され、現在に至るまで継続されている。

## 3 調査

### 3.1 調査概要

「MSM 対策研究班」との協働体制の構築のために福岡で組織されたゲイ NGO 「Love Act Fukuoka (LAF)」を調査対象とした。

2016年3月より、継続的 LAF が運営するコミュニティセンター haco を訪問し、専従スタッフや LAF のボランティアスタッフに対する聞き取り調査、スタッフミー

ティングへの参与観察などを実施した。

聞き取り調査、参与観察による調査データにくわえて、LAFが展開してきた予防啓発活動の内容を把握するための資料として、研究班によって刊行される厚生労働科学研究費の研究報告書やLAFが発行する刊行物を用いて、LAFの予防啓発活動の変遷と活動理念を分析した。

### 3.2 調査結果

#### (1) 予防啓発活動の変遷

LAFの予防啓発活動は、その内容から、①LAFの結成からコミュニティセンター開設前まで（2003年～2006年頃）、②コミュニティセンターの開設からセンターの事業化まで（2007年～2011年頃）、③コミュニティセンターの事業化以降（2012年頃～現在）の3つの時期に区分された。

まず、①では、地方都市である福岡はコミュニティが未成熟であり、キーパーソンも不在であるため、予防啓発を継続的に行うためには、行政や医療機関、研究者がNGOをバックアップする体制を構築し、また、同時にコミュニティを活性化する必要があるという啓発活動の方針がとられた。そのため、当初の活動はクラブイベントでの予防啓発、コミュニティ活性化のためのイベント開催を中心として始まり、それと並行してゲイバーで開催する勉強会などを通じてLAFのコアメンバーの育成が行われた。そして、LAFのコアメンバーの定着にともない、大都市圏で行われてきたコンドームやコミュニティペーパーの作成・配布などが行われるようになっていった。また、このような活動の中で、他の地域と同様にコミュニティセンターの開設が期待されるようになった。

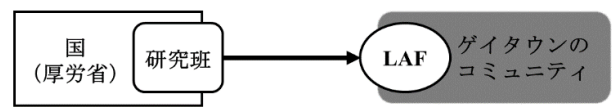
つづいて、②では、LAFとゲイタウンのコミュニティが連携を行い予防啓発を行う必要があるという認識が構築され、また、予防啓発を効率的に行うためにコミュニティのなかの予防啓発に興味のない人々をLAFやコミュニティセンターに誘導するという方針がとられるようになった。ここでは、従来のコンドームやコミュニティペーパーの作成・配布に加え、ゲイタウンに集う人々をコミュニティセンターに会場させるためとして、センターで勉強会や啓発を直接の目的としないイベント、展示会などが開催されるようになる。ここでも、クラブイベントやゲイバーと連携した啓発は行われたが、それは、研究班とNGOを含むコミュニティとの協働から、NGOであるLAFとコミュニティとの協働として、異なる位置づけをされるようになってきた。

③では、コミュニティセンターが厚生労働省によって事業化され、資材作成などの予算がセンターの運営費と

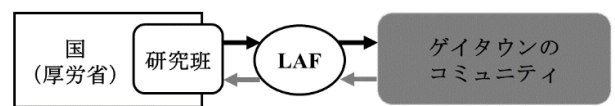
ともに事業費で賄われるようになると、研究班の規模縮小による福岡地域の分担研究廃止も相まって、従来の研究班によって主導されてきた啓発の方針が大きく変化することとなる。LAFのメンバーらによって、従来の資材配布やコミュニティとの協働によって予防啓発を行うことへの限界が認識され、コンドーム配布の廃止やコミュニティペーパーの休刊が行われるようになった。また、大規模な啓発イベントを開催に変えて、行政との連携によるHIV抗体検査の広報活動を予防啓発の中心とするようになった。コミュニティセンターで行うイベントでも、ゲイタウンとの関わりがない人に向けたものを行うようになり、10代を中心とする若年者向けの交流会や、男性同性愛者以外の性的マイノリティの交流会なども行うようになった。

このような予防活動の変遷の背景にはゲイタウンのコミュニティとの対立や研究班との啓発の論理をめぐる対立があり、3時期のHIV・エイズ対策をめぐるアクターの関係性の変化に注目して整理すると図1のように捉えることができる。

#### (1) LAFの結成～



#### (2) hacoの開設～



#### (3) コミュニティセンターの事業化～

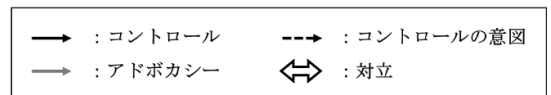
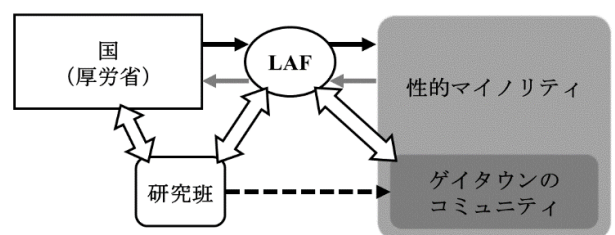


図1 HIV・エイズ対策をめぐるアクターの関係

当初、ゲイタウンのコミュニティの成員から組織されたNGOは厚労省の意向を背景とする研究班からの社会的防衛的なコントロールの客体となったが、次第に、研究

班によるコミュニティへのコントロールの中間的な担い手となっていった。しかし、LAFは次第に権利擁護者としての主体性を確立し、ゲイタウンのコミュニティにとどまらない、ゲイタウンに関わりをもたないゲイや性的マイノリティを自らが擁護すべき対象として想定するに至ったのである。

新ヶ江（2013）は、ゲイ NGO がエイズ対策を担う従順な主体となったことを指摘したが、LAF が展開してきた予防啓発活動の変遷をみると、新ヶ江のいう従順な主体にとどまらない主体性の確立がうかがえ、LAF が対立を経験しながら、新たな活動の展開を模索し、従来のゲイタウンの人々との協働とは異なるかたちで、新たな連帯を編成しようとしてきたことが明らかとなった。

## （2）活動理念

LAF の担い手による活動理念の語りの分析では、LAF の運動性が①当事者性と②戦略性によって構成されていることが明らかとなった。

①当事者性は、疫学的な「正しさ」への違和感という疫学的介入そのものへの抵抗と、研究者の意向によって、ゲイを主な構成員とする NGO が下請け的な活動を強いられるという研究班の構造への反発として立ちあらわれ、疫学的な予防啓発の限界を乗り越えるオルタナティブな価値観を提示しようとする当事者目線の活動方針を目指すものである。

②戦略性は、HIV・エイズに対する社会的関心や、性的マイノリティに対する社会情勢を注視しながら、活動を持続的なものとしようとする方針であり、LAF は HIV・エイズの問題を社会的課題とし、活動を運動性のある市民活動として継続させるために、HIV・エイズの問題を「LGBT」問題のなかに位置づけ、性的マイノリティをめぐる活動を緩やかに組織化しようとする戦略性を発揮している。

研究班による一連のプロジェクトという大きな枠組みの中で、活動資金の安定的な確保や専従スタッフの設置といった事業性を付与された LAF は、その活動の当初においては運動性を見出すことは難しい。しかし、LAF の活動理念における当事者性と、それに根差した戦略性の語りからは社会的課題と真摯に向き合い、したたかに活動を展開していこうとする運動性の獲得の過程が見てとれる。

本郷正武（2007）はエイズ関連の市民活動団体について、その事業性を下支えする運動性の重要性を強調しているが、LAF においては本郷の指摘する二者が、事業性を与えられた活動のなかで、活動の継続性のための戦略

性とそれを支える当事者性が醸成されるというかたちであられる。つまりは、事業性に下支えされる運動性という関係性である。

研究班と協働体制にある NGO 等の活動は、新ヶ江（2013）が「国家による従順な主体形成」と指摘した通り、国家や体制との「対抗」的な関係性から出発したものではないが、LAF は研究班という既存の枠組みのなかで、たんに「従順に」活動を遂行したのではなく、既存の枠組みを、いわば換骨奪胎しながら活動を行う運動性を展開させてきたのである。

そして、この LAF のもつ運動性は、同化主義とラディカルリズムという二つの志向性を往還するものとして位置づけることができる。つまり、LAF が当事者性に立脚して疫学研究者の専門性のオルタナティブを提示しようとする点では、極めて対抗的なラディカルリズムの志向性をもつものと考えられ、その一方で、厚生労働省によるコミュニティセンター事業を受託して活動を安定的なものとして持続させ、また、社会的な問題関心を常に注視し、「LGBT」という言説資源を積極的に取り込もうとする戦略性という点においては、同化主義的な志向性をもつものでもあると言える。LAF はまさにこの二つの志向性を往還しながら、漸進的に運動を展開し、新たな連帯を編成しようとしているのである。

## 4 まとめと課題

LAF による福岡における活動の展開から、運動エイズ政策のもとに形成された主体が、活動のなかで運動性を獲得し、自らが志向する価値にもとづいて連帯を編成しようとする動的な営みとしてのゲイコミュニティの姿が明らかとなり、その連帯のありようがゲイのみにとどまらない性的マイノリティによる連帯として暫定的に把握された。

LAF のもつラディカルな当事者性と同化主義的な戦略性という二つの志向性を取り込んだ漸進的な運動性は、少数のアクターによって担われる福岡での性的マイノリティの運動の特徴として仮説的に位置づけられるが、今後、LAF による連帯の編成がもちうる排除性に留意しながら、運動の展開可能性を探る必要がある。

### 主要引用文献

- 本郷正武, 2007, 『HIV/AIDS をめぐる集合行為の社会学』ミネルヴァ書房。
- 石田仁, 2006, 「セクシュアリティのジェンダー化」江原由美子・山崎敬一編『ジェンダーと社会理論』有斐閣, 153-65。

- 河口和也, 2016, 「わたしたちはここにいる——地方中核都市に生活する性的マイノリティの『語り』から」『理論と動態』9: 73-91.
- 森山至貴, 2012, 『「ゲイコミュニティ」の社会学』勁草書房.
- 新ヶ江章友, 2013, 『日本の「ゲイ」とエイズ——コミュニティ・国家・アイデンティティ』青弓社.
- 砂川秀樹, 2015a, 『新宿二丁目の文化人類学——ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』太郎次郎社エディタス.
- , 2015b, 「多様な支配, 多様な抵抗」『現代思想』43(16): 100-6.